

主の恵みはとこしえまで

歴代誌下 7:1-10

1

導入

歴代誌が、サムエル記と列王記と同じ時代の歴史を表している。ということは、サウル、ダビデ、ソロモンと続いたイスラエルの王国の時代、ダビデがちょうど紀元前1000年ころの人ですから、3人が40年ずつ治めて、その後王国が北と南に分裂して数百年の間の歴史ということになります。これが紀元前440年頃、エズラによって書かれた、ということは、バビロン捕囚から解放されてちょうど100年が経過したころの人たちが、歴代誌の最初の読者であったということになります。希望に燃えて祖国再建に乗り出した帰還民たちに、その使命を奮起させるために、礼拝の重要性を再認識させるために書かれたというのですが。そこにはまた、自分が神の契約の民の一員であることを証明するものでもある、ユダヤ人の系図が長々と記されていて、それは神の贖いのご計画を記した、という点でも重要でした。今日のわたしたちに当てはめてみると、第一次世界大戦が終わって100年が経過したわたしたちに、戦国時代以降の歴史が語られているということになりますが。たとえば、大河ドラマなどをご覧になって、何かメッセージが語り掛けられているというふうに、最初のメッセージの受け手に届いたのでしょうか。

イスラエルの人たちは、よく歌を歌いました。彼らは、夜回りの歌とか、酒飲みの歌とか、井戸掘りの歌とか、嘆きの歌とかを歌いました。なんでも歌にしちゃうんですね。でも、何よりも彼らは、事あるごとに、神への感謝と賛美を歌いました。彼らが、出エジプトの奇蹟を経験した時、まずしたことは、神を賛美することでした(出エジプト15)。ひとりのリーダーが歌いだすと、会衆が和して答えるということを繰り返しました。それは、黙示録に描かれている天の御座の前でのさながら賛美です。聖徒たちが新しい歌を歌い、御使いたちが大声で歌い、一切の被造物が賛美し、四つの生き物がアーメンと言う。一切は神さまから来るわけですけれども、賛美と賛美の間には、救いの泉から水を汲むという行為が挿入されます。それがまた彼らの、そしてわたしたちの醍醐味でしょうか。

本論

ソロモンが祈り終わった時、何が起きたでしょうか？主の栄光が満ちた！とあります。わたしたちが祈り終わった時、何が起きるでしょうか？最近のオンラインの祈禱会はお互いのために祈り合うんですね。わたしは、いつもあのナオミとルツの祈りを思い起こしながら、互いのために祈り合う、しかも、主に感謝して、主のいつくしみを執り成し合

う、神のご計画のために運命を共にする覚悟の祈りを思い起こしながら、主に祈りを導いていただいているのですが。ソロモンが祈り終わった時、主の栄光が満ちたんですね。ソロモンが祈り終わった時、とあるんですけれども、これは、かなり祈り込んだ形跡が伺える表現になっています。ソロモンがかなりの時間をかけて祈り込んだ後で、主の宮が主の栄光で満たされました。祭司たちが決して入ることができないほどに、主の栄光が主の家に満ち溢れていました。イスラエルのすべての人が、主の栄光が主の家に現れたのを観て、跪（ひざまず）いて、「主はまことに恵み深い。その慈しみはとこしえまで。」と賛美しました。そして献身のしるしであるいけにえを主の前にささげました。夥（おびただ）しい牛と羊が犠牲としてささげられました。わたしたちの祈禱会においても、主がなされたことを確認して、わたしたちが歓びに満たされたということを主が導いてくださっているように思います。

先月のイザヤ書の学びで、今まで味わったことのない手応えを感じたのですが。わたしたちが経験し得る絶望の状態を、イザヤは、「株」と表現しました。絶望的な状況を「株」だけになった時、にイザヤは見立てました。そこから、「エッセイの株」から一つの芽が生（は）え出でて、その根から若枝が育つ！と。イザヤは、それがわたしたちに用意してくださった神さまの希望だと言いました。わたしたちが経験し得るあらゆる絶望の状況に、主がそこから生え出でる芽を、その根から育つ若枝を用意してくださった！

この「芽」、「若枝」と言い表されたお方が、わたしたちの主イエス・キリストです。このお方は、神さまとわたしたちを隔てる中垣を取り除き、わたしたち同士を隔てる中垣を取り壊し、わたしたちを滅びから区別して、わたしたちが生きる限り助け手となって力強く導いてくださるお方です！弱者に苦しむ者に、深い眼差しで正義を公平をもたらしてくださいます！代価を払ってわたしたちを悪しき者より買い戻してくださいます！その際、主がお用いになるのが、ご自身の「手」と言われるところのキリストです。ですから、わたしたちが買い戻される、その拠り所は、キリストです。あの出エジプトがすべての人に起こるのです。主がわたしに怒りを向けられた。その怒りをキリストのゆえに去らせて、むしろ慰めてくださった。主が大いなることをされた。主のいつくしみをとこしえにほめたたえさせてくださる！わたしたちには、水を汲むという作業が残されています。託されています。水を汲んだしもべは知っているという作業です。毎週主に感謝し、賛美するために礼拝をささげる、その合間に、水を汲む作業が待っています。

結び

1節のみことば、いけにえを天からの火でなめ尽くしたとは、キリストの代価がやはり神ご自身に支払われたことを表していますね。その恵みにわたしたちがあずかることを主の栄光が表されるというのです。罪をもったままでは、神さまの前に出ることはできません。キリストの十字架の代価は、そのことをも可能にしてくださいました。わたしたちは、そのところで、主を礼拝するのです。キリストの十字架の代価が、わたしたちがささげうる感謝と献身の間に存在します。賛美も楽器を奏することもすべてはキリ

ストの十字架の代価と結びついています。こうして礼拝に導かれるお互いは、晴れやかな心に導かれるのですね。みなさんの今の心境がそうあることを祈ります。